幕末を駆ける

神坂次郎

中公文

中公文庫 幕末を駆ける
一九八九年一〇月一〇日初版
一九八九年一一月一五日再版
著者 神坂次郎
発行者 嶋中鵬二
整版印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201652-5
Printed in Japan
©1989

中公文庫

幕末を駆ける

神坂次郎著

中央公論社

目次

たった一人の攘夷党 7
影（シャドウ・ボーイ）男 41
幕末赤軍派 91
西郷暗殺の密使 119
暴れ道竜 147
猛女記 165
開化乗合馬車 193
あとがき 218

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

幕末を駆ける

たった一人の攘夷党

〈陣屋瓦に深日どびん
背戸で拾うた花見蛸
ほほいのほい
（泉州たたき節）

一

大阪府も最南端の和歌山県に隣接する泉南地方は気候温暖で、泉州特有の段丘を背にした海沿いの小さな町々は、海あかりに映えて奇妙なまでに明るく、のどかなたたずまいをみせている。のどかなのは風景だけではない。毎年、白い蕎麦の花が咲く頃になると、蛸が行列をつくって花見にやってくる。村びとたちは、そんな蛸を手摑みに拾ってきた。

「ここらは潮のひくのが早うてナ、浜に出ると、まごまごしている蛸が、そりゃもうナンボでもあった。和泉は蛸の本場で、なかでも、ほりゃ花見蛸がいちばんよ。そうじゃの、こうして掌をひろげた……、これくらいの小っこい蛸ですわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

そんなのんびりした光景が、現在から十年ほど前まで見られたと辻源次郎老はいう。

ま、その蛸ばなしはともかく、幕末の頃、この泉州淡輪陣屋の代官に、大月庄左衛門という男がいた。

淡輪はじめ深日、谷川など十一ヵ村は常州土浦藩九万五千石土屋采女正の領分で、高八千二百石の地である。大月庄左衛門の行状を略叙した「石頭記」という筆録本によると、幼にして剛強の風を好み、並はずれた木強漢で、それでいてどことなくおかしみのある男であったという。稚いころから庄左衛門（以下庄左と略す）は祖父の大月鶴亀助の膝の上で、武勇談を聞かされて育った。

その武勇談というのは、享和三年（一八〇三）常陸国土浦藩領に近い女化原（現在、茨城県稲敷郡牛久市）に集まった近郷四十ヵ村の百姓一揆に、牛久藩から救援を求められ、土浦藩兵百二十余人が出動し、みごとに蹴散らし鎮圧したという一件である。

この時、祖父の鶴亀助は、雲かすみと群がる一揆軍にむかって、

「この生意気ども、来ーば来い！」

と破れ鐘のような声で叫びあげ、土浦藩の先頭をきって突貫したという。

「祖父つぁ、怒鳴ったでやンすか」

「おおども、弓を引きしぼり、一つ二つ矢をかっくらせると、馬を嘶かせて一揆サの中に黒つむじのごど突っこんだ……するど、いままで呆然と見でいだ土浦兵も、祖父つ

あの後から駆けでくる――周章狼狽した一揆サは、水戸街道を逃げる逃げる……後はもう支離滅裂……」

「そうげぇ！」

鶴亀助の功名譚に、庄左は眼をかがやかせた。

そんな庄左の目裏に、大月家伝来の赤具足に身を固め、銀のナマズを前立てにした頭形の兜を猪首にかぶり、三つ団子に箸片っ方の紋じるしをつけた差物をはためかせた祖父、鶴亀助が、土を蹴り草を飛びこえ、怒号しながら唯一騎、群がる一揆軍の中へ躍りこみ、血ぶるいをして突き進んでいく姿が浮かびあがってくる。

〈男ァ功名よ〉

戦さばなしの結末を、鶴亀助はいつもこう言ってしめくくる。

〈男ァ功名よ〉

それは、幾度聞いても血が熱くなる話であった。

けれど、この勇壮無類な、武田高天神衆を祖にもつ祖父にくらべると、父の宗兵衛の生きざまは、あまりにも精彩を欠いたものであった。いつも、どこか気の洩れているような精気のない宗兵衛を見るたびに、庄左はがっかりした。

〈なんともはや気骨ない父っつぁ〉

二

庄左が二十二になった春、藩庁に隠居届を出した宗兵衛は、家督をゆずった。この時期、祖父の鶴亀助はすでに世にない。

初出仕の前夜、庄左を仏間に呼びいれた宗兵衛は、仏壇に燈明をあげるとおもむろに父祖の霊に礼拝をささげ、ひどく勿体ぶった顔つきで庄左のほうを振り返り、

「よいか」

といった。

「わが大月家のあるじは、明日からはお前である。されば、いまより御奉公の条々を申しきかせる……そもそも」

宗兵衛の話は諄(くど)い。それがまた念に念を入れて、じつにくどくどと、わが家禄を支えている役向きについての心労、艱難の数々を事例にあげ、えんえんと説きだしたのである。

大月家は御勘定所勝手方に属して収税や金穀の出納など財政会計をあずかる役向きで、ときには支配地を巡見したり、陣屋に詰めたりすることもある。そこで厄介なのは、土浦藩九万五千石が、まるで碁石でもぶち撒いたように各地に散らばっていることだ。そ

の領分は四ヵ国十郡。まず常陸国新治郡で三十二ヵ村、筑波郡で四ヵ村、信太郡で十三ヵ村、茨城郡で三ヵ村。それに下総国、相馬郡。和泉国は大鳥郡、和泉郡、日根野郡、南郡。近江国では伊香郡という具合に散乱している。

宗兵衛の説明を聞いているうちに、庄左は頭が茫としてきた。この調子では個々の村名はおろか、国名郡名でさえ覚えきれない。

「……さてとよ、あれは北目陣屋にいた頃であったか」

宗兵衛は、おのれの述懐を自分で裏打ちしようとするのであろう、律義に実直に、ことさらに沈痛な面つきをすると、ゆっくり頷いてみせた。べつに意味などない。話の区切りに頷いてみただけのことである。

宗兵衛のくどくど話をきかされているうちに、一刻たった。話はまだつづきそうである。庄左は、それを考えると頭が痛くなってきた。

〈かなわぬなぁ〉

こうして庄左は、勘定所に出仕することになる。が、正直にいって、勘定所勝手方見習の日々は、あまり愉しいものではなかった。

〈これが武士のする仕事か〉

陰気な役所の片隅で、いつも胃の腑でも病んでいるような生気のない上役や同僚たち

や饐えたようによどんだ空気と書類の山に囲まれ、そろばんを弾き帳簿をひろげて机の前で坐っていると、滓のようなものが次第に体の中に蓄ってくるような気がしてならなかった。考えれば考えるほど、庄左はやりきれなくなった。

〈あたら、おれほどの男が、こんなところでそろばん玉を弾いていてよいのか〉

さむらいとは、いかに役向きに恪勤し、算勘に精通していても、それが一体なんであろう。侍が侍であることを表現するには、武技しかあるまい。

〈おれは、祖父つぁになる！〉

勘定所の役方でありながら、番方（武官）も及ばぬほどの功名をたてたあの偉大な祖父、鶴亀助のようになってやるのだ。庄左はそう思った。そう思うと、急に眼の前が明るくなったような気がした。

三

いらい庄左は、非番の日を待ちかねて、藩校の郁文館に通い、骨が高鳴るほどの稽古をはじめた。

郁文館はまた文武館ともいわれ、文武両道を振興するために建てられたものである。江戸の儒者、藤森弘庵を招いて督学（校長）に任じ、文館では主として実学を、武館で

は武技の錬磨を通じ藩士たちの錬成を図っていた。

武館は藩の公用人、大久保要がこれを束ね、剣技の指導は天保の終りから弘化にかけての一時期、男谷精一郎、大石進と並んで天下の三剣豪とうたわれた島田虎之助が当っている。

といって、べつに島田虎之助が庄左に剣の手ほどきをしてくれるというわけではないのだが、そんなことは庄左にはどうでもいいことであった。ただ木刀を握っているだけでよかった。だから庄左は、いつも、どこか故障でもしたあやつり人形みたいな恰好で空間を斬撃し、すさまじい声を叫げて道場の隅で跳ねまわっていた。

「えい！　とう！　たあッ！」

武館に通うようになって、庄左の身装は一変する。もともと庄左は、躰つきが堂々としている。衝立のように張った肩と肩のあいだにすわっている大きな顔、眉が濃く唇が厚く、目鼻だちも大きい。その庄左が、雄偉な体軀に短袴をはき、毛脛を剝きだし、長剣を閂差しにしてどすっ、どすっ、と地べたを踏みつけるように闊歩するさまは、戦国争乱の荒武者を髣髴とさせるものがあった。

〈男ァ剣術よ〉

そのころ、武館で野試合が催された。

野試合は道場稽古ではない。草鞋をはき野外に出る。面、籠手、竹胴をつけ、十数間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor